大槌町調査隊報告書

原田　生知（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局　薬剤師）
中嶋　優太（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局　薬剤師）
葛西　豊誠（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部　総務担当）
八木橋郁夫（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部　総務担当）
町田聖二郎（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部　総務担当）

大槌町調査隊は、東日本大震災直後の平成 23 年 5 月～6 月にかけて岩手県大槌町の大槌高校救護所で行われた青森県医師会 JMAT 活動サポートに参加したメンバーをもとに結成された。その目的は日本医師会より JMAT 活動サポートに対して送られることとなった活動費について、大槌町の復興に役立てる有効な使途を調査することである。なお、本調査は JMAT 活動に参加した株式会社町田アンド町田商会社員及び医療法人整友会弘前記念病院職員の総意により行われたものである。以下にその調査報告を記す。

【期　間】

平成 24 年 9 月 6 日（木）～平成 24 年 9 月 8 日（土）

【調査隊メンバー】

隊長（A 班班長兼任）

　原田　生知（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局　薬剤師）

副隊長（C 班班長兼任）

　苫米地真理子（医療法人整友会弘前記念病院　理学療法士）

B 班班長

　中嶋　優太（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局　薬剤師）

隊員

　葛西　豊誠（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部　総務担当）

　八木橋郁夫（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部　総務担当）

　町田聖二郎（株式会社町田アンド町田商会 農事営業本部　総務担当）

　石井　　恵（医療法人整友会弘前記念病院　看護師）

　鈴木　樹里（医療法人整友会弘前記念病院　理学療法士）

A 班　：原田・葛西

B 班　：中嶋・八木橋

C 班　：苫米地・石井・鈴木・町田

【行動記録】

A 班　1 日目　9 月 6 日（木）

　7：00　本部出発

　10：30　釜石市到着　レンタカーへ分乗

　11：00　大槌町到着　「おらが大槌復興食堂」で昼食

　13：00　大槌町役場訪問

16：00　釜石市保健所訪問（大槌地区生活保護・医療機関状況調査）
18：30　ミーティング

A班　2日目　9月7日（金）
6：30　起床
7：00　朝食
7：30　ミーティング
8：00　釜石市出発
9：00　大槌町内乳幼児施設訪問（みどり幼稚園・大槌保育園）
11：30　大槌町着　MAST内で昼食
12：30　大槌町内乳幼児施設訪問　（大ヶ口幼稚園・大槌町託児所）
15：00　一般社団法人「おらが大槌夢広場」訪問
16：00　大槌町内乳幼児施設訪問　（安渡保育所・おさなご幼稚園）
17：30　大槌町出発
18：00　釜石市着

A班　3日目　9月8日（土）
6：30　起床
7：00　朝食
7：30　ミーティング
8：00　釜石市出発
9：00　大槌町漁港　漁業復興状況調査
10：30　城山城址
11：00　大槌町発
11：30　シープラザ釜石で昼食
12：30　釜石市発
16：30　弘前着

B班　1日目　9月6日（木）
7：00　本部出発
10：30　釜石市到着　レンタカーへ分乗
11：00　大槌町到着　「おらが大槌復興食堂」で昼食
13：00　大槌町社会福祉協議会訪問
佐々木亮氏より現地仮設住宅生活状況等調査
15：00　大槌町内視察
大槌町漁港、小槌神社、東大大気海洋研究所

17：30　道又内科小児科医院訪問
18：00　大槌町発
18：30　釜石市着　ミーティング

B班　2日目　9月7日（金）

6：30　起床
7：00　朝食
7：30　ミーティング
8：00　釜石市出発
9：00　堤乳乳幼児保育園訪問
9：30　吉里吉里保育園訪問
10：30　山田町方面視察
山田南小学校訪問　佐賀校長と面会
船越地区　元避難所訪問
11：30　大槌町着　MAST内で昼食
12：30　大槌町大槌方面へ農業復興状況調査
14：00　大槌高校訪問　佐藤副校長と面会
15：00　大槌町小槌方面へ農業復興状況調査
17：30　大槌町出発
18：00　釜石市着

B班　3日目　9月8日（土）

終日A班と共に行動

【大槌町の状況について】

大槌町総務部総務課の藤原氏の紹介により、町の現状と復興計画について大槌町役場福祉課、復興推進室、被災者支援室を訪問した。

大槌町役場は被災直後のプレハブの仮役場から場所を隣にあった旧大槌小学校を改修した新役場に場所を移し業務を行っている。

福祉課では大槌町仮設住宅住民の健康状態について、福祉課の藤原純枝氏からお話を伺った。福祉課では平成23年8月初めより町内の全戸訪問を開始し町民の健康状況の把握に努めたとのことである。現在は社会協議福祉会、LSA（東日本大震災生活支援協会）、地域支援員の3者の協力を得て、仮設住宅の談話室を拠点として地域

大槌町役場福祉課にて藤原氏と

の保健衛生活動を行っている。大槌町は以前より食習慣等が原因で他地域よりは高血圧患者が多かったが、震災直後は一時的に高血圧症状を訴える人が増えたようだとのことであった。現在は状況が落ち着いたこともあり、住民の健康状態は震災以前と同じ状況に戻っているとのことである。当初、私たちが支援物資として計画していた血圧計、体温計について不足はなく、十分に行き渡っているとのことだった。

町民の健康状況の把握は、震災直後の全国各地からの保健師の応援もあり、十分に行われたとのことである。震災直後に質、量ともに十分な医療支援があったことから、逆に震災以前の平常状態に戻った時に住民からサービス低下を指摘され、現在が震災前の本来の姿であると説得したこともあるというエピソードも聞かせて頂いた。

地元医療機関が比較的早くに復旧したことから、現在の医療体制は震災前とほぼ同じ環境となっているとのことである。今後は、保健師の活動拠点となる建物などのハード部分の充実や住環境改善による生活再建が課題であるとのことであった。

大槌町役場にて小國氏と

復興推進室では小國晃也氏より「復興まちづくり」及び「鎮魂の森」構想などについてお話を伺った。瓦礫の処理には今後 3～4 年を要する見込みであることや、区画確定が必要なため被災した区画もすぐには土台を撤去出来ない状況であることなどが説明された。復興計画は平成 30 年度までを復旧期（第１期）、再生期（第 2 期）、発展期（第 3 期）に分けて実施される予定であるが、現在は第 1 期の実施計画が平成 24 年 3 月に策定されたばかりであり、実行に際して区画確定や予算の面でまだまだ不確定要素が多いとのことである。住民にとっても長い 6 年間になりそうであった。また、今のところ民間団体と連携して行う事業予定はないとのことであった。

被災者支援室では室長の田中恭悦氏、主査の小國淳美氏、主事の松山尚子氏の 3 氏より、仮設住宅や義援金配分状況などについて説明を受けた。被災者支援室は平成 23 年 11 月に設置された部署で、大槌町役場職員の他、盛岡、花巻、東広島からの自治体職員と民間業者職員の派遣により運営されている。主な業務はコミュニティ支援であり、仮設住宅支援も主要な業務とのことである。大槌町の仮設住宅の状況を教えて頂いたところ、平成 24 年 8 月末現在の仮設住宅数は 48 団地、2,106 戸であり、入居者数は 2,059 世帯、4,665 人であるとの

こと。平成 24 年 7 月末から 10 月にかけて、仮設住宅に物置が設置されるとともに、風呂の追い炊き機能の追加工事も進めており、少しずつではあるが仮設住宅の住環境も改善されつつある。仮設住宅には地域支援員が各地区 1 名のマネージャーを筆頭として、サブマネージャーが 1～2 名、支援員 8～19 名の計 10～20 名体制で配置され、仮設住宅のコミュニティづくりに貢献している

義援金については個人、法人から直接大槌町に送られてきた分が平成 24 年 8 月末現在で 348,559,452 円（1,767 件）であり、その歳出内訳としては申請による「死亡又は行方不明見舞金」「家屋損壊等見舞金」などの見舞金として配分されているとのことであった。また、「未成年者見舞金（両親死亡）（片親死亡）」を設け、不幸にも親を震災で亡くした子供たちに手厚く支援を行っているとのことである。現在も申請を受付け中であり、その執行率は 45.6%、収支残額は 188,399,452 円である。

一方で、国及び日本赤十字社からの災害義援金は平成 24 年 8 月末現在、歳入 8,610,827,000 円に対し歳出 7,738,821,000 円であり、執行率 89.9%、残額 872,006,000 円である。歳出内訳は人的及び住家被害に対する災害義援金などであり、3 次にわたり配分されたとのことである。

【医療機関の復旧状況】釜石保健所

釜石保健所企画管理課主事　小笠原伸也氏より大槌町内の医療機関の状況について説明を受けた。県立大槌病院を除いて町内に 6 施設あった医科診療所は今回の震災ですべての施設が全壊となったが、平成 24 年 9 月現在 3 施設が仮設で再開、1 施設が新築施設による本格再開となっている。歯科診療所は医科診療所と同様震災前にあった 6 施設すべてが全壊となったが、平成 24 年 9 月現在 4 施設が「大槌歯科診療所」として 1 か所に集まり共同診療中である。残る施設中 1 施設は廃止、もう 1 施設は現在も休止中である。歯科の場合は同一敷地内での共同診療にはなじまないため、準備が整った歯科診療所が今後順次場所を移しての本格診療を開始していくものと思われるとのことであった。薬局は震災前にあった 6 薬局中全壊 5、大規模半壊 1 という被災状況であり、平成 24 年 9 月現在本格再開 4、仮設再開 1、廃止 1 である。仮設で再開している 1 か所についても間もなく新薬局着工予定とのことである。県立大槌病院については 3 年後を目途に本格的に再開する計画である。現在は建物が仮

新設された医療機関

設のため、従来担っていた慢性期の入院機能が失われている状況だが、釜石市内5つの病院の受け入れで十分対応出来ており、釜石・大槌医療圏で見た場合、ベッド数に不足はないとのこと。また、釜石・大槌医療圏内の医療機関同士の連携も良好であるとのことであった。

【道又医院を訪問して】

1．大槌町の現在の医療体制について

道又内科小児科医院を訪問し、道又衛院長に現在の医療体制の復旧状況をお伺いした。道又内科小児科医院は今夏に現在地（県立大槌病院仮設診療所隣り）に移転新設したとのことであるが、他の医療機関は現在も仮設施設で診療を行っている。現在、県立大槌病院仮設診療所に入院機能がないため入院が必要な患者は釜石市内の病院に移送する体制をとっている。道又院長によれば、大槌町の医療機関の入院機能については24時間体制に耐えうる医師や看護師等の医療スタッフの雇用や、入院食の準備などの様々な問題があり、県立大槌病院の新設移転後に改めて医療体制を検討しないと有床機能を回復することは難しいのではないかとの見解であった。また県立大槌病院の新設は、同じく被災した近隣の県立山田病院、県立高田病院を含め、建て直しに向けた予算は既に組んであり、現在は各自治体で新設移転場所をどこにするかを検討している段階であるとのことだった。県立大槌病院の場合、市街地の区画整理や土地の整備などの進捗状況と建設期間を考えると 3－4 年後の平成 28 年以降にならないと新設病院での一般診療の開始は難しいのではないかとのことである。

2．医療機関へのアクセスについて

震災前は多くの町民が旧市街地に住み、徒歩で近くの医療機関に通えていたのが、震災後、山間部の仮設住宅に住居を移さざるを得なくなったことや、医療機関が被災し郊外に移転したことで町民が医療機関に受診しづらい状況となっている。道又院長も医療機関へのアクセスの不便が一番大きな問題であると話をされていた。バス路線はあるが 2 時間に 1 本程度の運行状況である上、幹線道路が主体のため、全ての仮設住宅や集落を網羅できていないとのことである。バス路線の利便性の向上は高齢者が安心して住める町づくりをする上で欠かせない課題であるが、路線や本数を増やすにも予算や運転手の雇用の問題などがありすぐには難しいだろうとのこと。バスは通院のための大事な“足”なので、各医療機関と避難所を巡回してくれるよう町役場に頼んでいるが、なかなか改善してもらえず残念とお話しされていた。このような状況のため診察時に長期処方を希望される患者や、家族や介護支援者などの代理受診が増える傾向にあるが、出来るだけ対応するようにしているとのことだった。

3. 震災直後とその後の医療提供体制

道又院長はご自身も津波の被害に遭い、震災翌日に救出され、その後高台にあった身体障者施設に常駐して具合の悪くなった避難者の診療にあたっていたとのことだった。今回の地震は阪神淡路大震災とは異なり、建物や家具の下敷きなどが原因となった外科的な処置が必要な怪我はほとんどなかったとのことである。残念なことではあるが、大きな怪我をする状況に遭った方のほとんどが津波にさらわれてしまったためではないかとのことだった。震災直後の診療場所は幸いなことに、福祉施設であったため、点滴などの備蓄薬品や施設利用者の薬を使用して脱水症状や高血圧、発熱などには対応することが出来た。十分な処方はもちろん出来なかったが、3-4 日後には保健所や DMAT から血圧、睡眠薬、精神安定剤、抗生剤などが届き始め、少しずつではあるが診療環境が改善した。診療で不足する薬もあったが、このような状況ですべての薬が揃わないのは仕方のないことであるし、診療を希望する患者側も理解してくれた。診療をめぐるトラブルや薬を取り合うなどパニックが起きなかったことがなによりであり、「お医者さんに診てもらった」「今出来る最善の策を取ってもらった」という心理的な満足を与えられたことが大きかったのではないかとのことである。その後は保健所や地元調剤薬局からの医薬品提供が始まるとともに、手書き処方せんを後日配達してくれるなどの環境改善が進み、診療の内容も向上した。

仮設診療所での診療を再開してからは細かな検査が出来なかった以外は通常に近い診療が出来たとのことである。医療に関しては、地域の連携や釜石医師会災害対策本部の調整があったため比較的早期に体制が整えられたのではないかとのことであった。

4. お薬手帳の重要性

道又院長より、震災後の診療ではお薬手帳の重要性を強く感じたとのお話があった。各方面から薬が供給されるようになっても、問診だけでは普段服用している薬やその用法用量が特定できない場合が多く、処方設計に困難があったとのことである。震災後はしばらく印鑑や通帳、金庫に保管するような重要書類は役に立たない。食べ物も 2－3 日飢えを我慢しさえすれば健康に影響はないし、支援物資も徐々に届く可能性が高い。診療はしばらく保険証が無くても受

道又内科小児科医院にて
道又衛院長と

けられるし、贅沢をしなければ 1 か月はお金を使う機会がほとんどないということを今回の災害を経験して感じたとのことである。一方で命に係わる薬に関しては、お薬手帳があればスムーズで安全な医療を受けることが出来るため、病院を受診している患者はなによりも先ずお薬手帳を持って避難するべきだと感じたとのことである。現在は道又内科小児科医院の患者のほぼ全員がお薬手帳を持参しているとのことである。お薬手帳の普及は薬剤師の重要な職務であると改めて感じたお話であった。

【仮設住宅の状況】

大槌町社会福祉協議会を訪問し、佐々木亮氏に現在の仮設住宅の状況をお伺いした。佐々木氏は大槌高校が避難所として使用されていた時の避難所代表であり、現在はお住まいの仮設団地で住民代表を務めている。最近大槌町ボランティア・NPO 連絡協議会「新生おおつち」を立ち上げ、仮設団地のコミュニティ作りや住民の声を行政に引き継ぐなどの活動を通じて大槌町の復興に向けご尽力されている。

大槌社会福祉協議会にて
佐々木氏と

佐々木氏によれば、仮設住宅は建築を請け負った業者、使用した材料や設備のメーカーによって住宅の造りや設備に少し差があるようだが、住宅の欠陥や改善して欲しい点などを町役場に相談すれば比較的すぐに改善してくれるのとのことである。追加工事の要望として玄関の風除室取り付けや、雨漏りの修理、住宅周りの排水関係などがあったが、いずれも改善されたとのことである。現在は風呂の追い焚き装置の設置をお願いしているとのこと。窮屈な生活を強いられているが、住民の訴えに対して町役場は速やかに対応している模様である。

松ぼっくりを使った手芸品

仮設住居の設備についての問題は落ち着いてきた一方でコミュニティの再生が今後の課題となっているとのこと。仮設住宅を決める際、予め住民の希望を取ったものの、最終的には入居先が抽選で決まったことで、希望通りの団地に入居出来なかった住民が多く、震災前に培われてきたコミュニティが薄れてしまったとのこと。現在は様々なボランティア団体が各仮設住宅団地を訪れ、お茶会やマッ

サージ、足湯などの住民が顔を合わせ、リラックス出来るような催し物を開催している。佐々木氏も松ぼっくりを活用した手芸品を作る催し物を開催しているとのことだった。作り手にやりがいを感じてもらえるように、完成したものは生協の協力を得て各地方で販売してもらい、その売上の 6 割が作り手に還元されるシステムをつくって活動しているとのことだった。

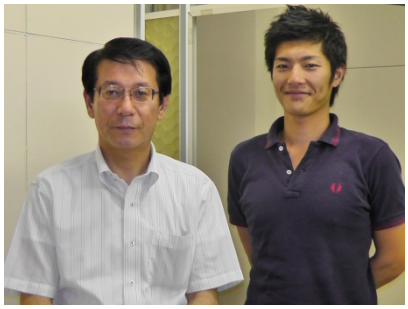
佐々木氏には仮設住宅の住民にばかり手厚い支援が入っていることに対して、未だ実現されない町の復興計画や長引く雇用問題などのストレスなどから、仮設住宅に住んでいない住民の間で不満が生まれつつあるのではないかとの懸念があるとのこと。また、今後仮設団地内でのコミュニティがうまく再生出来たとしても、将来的にはまた別々の地域に引っ越さなければならないことが予想され、以前から住んでいた住民と仮設団地から引っ越してきた住民との間で感情的な摩擦が生まれる可能性があることを心配されていた。

【元避難所（山田南小学校・大槌高校）の状況】

山田町立山田南小学校と岩手県立大槌高校を訪問した。両校ともに震災直後から避難所として使用されていた学校で、山田南小学校は当社の第一次派遣隊の救護所支援を行った場所であり、大槌高校は JMAT のサポート活動をおこなった場所である。訪問した際には第一次派遣隊ならびに当社の JMAT 活動に対する労いと感謝のお言葉を頂いた。両校とも昨年 8 月中旬をもって避難所は閉鎖され、学校側に引き渡されたとのことである。引き渡しの際には避難所住民による清掃や備品の補充が行われたため、学校活動はスムーズに再開できたとのことだった。

山田南小学校にて佐賀校長と

山田南小学校の佐賀校長からは、今後も生徒に対する継続した心のケアが必要であるとのお話があった。今回の震災で家族や友達が犠牲になった生徒はもちろんだが、友達が急な転校を余儀なくされた生徒に対しても心のケアが必要であり、現在は定期的に他県から派遣されている相談員がそのケアにあたっているとのことだった。他にも校庭の一部が仮設住宅団地の用地になったことによる学校と仮設住宅住民間での問題や、仮設住宅への引っ越しにより通学が困難な生徒が出るなどの問題があった。学校側では近隣住民との交流を深めるイベントの開催や、日本赤十字社から寄贈された送迎バスで仮設住宅を回るなどに



大槌高校にて佐藤副校長と

より対策を取っているとのことだった。

災害時に必ず避難所となるはずの学校であるが震災後の町の復興対策会議や防災対策会議などには一度も呼ばれたことがなく、行政との間に温度差を感じるとのお話もあった。

【町内の幼稚園、保育所、小中学校の状況】

大槌町内の乳幼児施設は全部で 8 か所である。津波により被災したのは 5 か所にのぼる。平成 24 年 9 月現在仮設で運営しているのは 4 か所である。小学校は大槌町内にあった小学校 4 校と中学校 1 校が仮設校舎大槌小中学校として「ふれあい運動公園サッカー場」に場所を移し、同一敷地内で校舎を別にして再開している。仮設建物はいずれもプレハブの上、冷房がないため、今年の夏の暑さにより熱中症がしばしば発生し大変であったとのことである。なお、冷房施設については、民間団体等による呼びかけもあり、設置される目途がようやく立ったばかりとのことであった。

みどり幼稚園にて園長先生と

不足している大型室内遊具

各種物資については現在のところ全国から送られてきた支援物資により十分賄えているとのことであったが、今後、仮設から新施設へ移った後に、今まで気づかなかった、被災前まであったもので不足に気づくものが出てくるかもしれないとの話が聞かれた。

町内の乳幼児施設すべてに聞き取りを行ったところ、AED や AED ケース、大型室内遊具、応急処置セットなどが支援物資や公的支援から漏れていたため不足していることが判明した。

【おらが大槌夢広場】

大槌町内で活動している民間団体から地域の状況を教えてもらうことを目的として、大槌町役場近くで「おらが大槌復興食堂」を運営している一般社団法人「おらが大槌夢広場」理事である臂徹（ひじ　とおる）氏を訪問した。「おらが大槌夢広場」は地元の若者を中心に各種プロジェクトを立ち上げ、大槌町復興に取り組んでいる団体である。「おらが大槌復興食堂」は市街地の活

「おらが大槌夢広場」にて臂氏と

性化を目的として設立された食堂で、復興ツーリズムで町を訪れた人たちなどへ地元の特産物を取り入れたメニューを提供している。また、雇用面でも地元の若者への働く場を提供するとともに、将来の独立開業に向けたスキルアップの場としての役割も果たしている。

「おらが大槌夢広場」の活動の柱のひとつに震災直後より全国各地から大槌町復興のために集まってきた大学生ボランティアをはじめとした若者たちと町の将来を担う地元の子供たちを交流させることによる人材育成がある。臂氏から色々とお話を伺う中で、今回の JMAT 活動費の有効な使途を検討していた私達は、その復興プロジェクトの中の「こども議会」プロジェクトに着目した。「こども議会」とは大槌町内在住の高校生を中心メンバーに模擬議会を開催し大槌町の復興案を大槌町役場へ提言することを目的として設立されたプロジェクトである。今回の JMAT 活動費の使途を「こども議会」で町の将来を担う高校生達に検討してもらうことは大槌町の復興にとって現実的な貢献の一助になるのではないかと思われた。

【農業関係の状況】

大槌地区の水田

今回の震災により水田の地割れ、地盤沈下や隆起がおき、初年度の水稲の作付けに影響を受けたとのことだった。土を新たに購入して水田をならすなどの対策を取ったが、田植えの前に行う整地作業「代かき」の時点で水が抜けてしまったり、湛水されないために除草剤の効きが上がらなかったりと大変苦労されたようだ。今年は地割れの影響のあった水田でも土がなじんだようで、これまでのところは水管理に関しての問題はないようだ。また昨年と比べ穂が大きく稔っており今年は豊作が期待できそうとのことだった。ただ、今年は気温の高さによる高温障害が心配され、品質低下による等級の格下げを懸念されていた。これら地割れなどの影響があった農地に対し、行政からの支援は何もなかったようだ。これに対し、津波により塩害を受けた農地は作物の栽培が難しいため、現在役場と農協が一体となり、イチゴなどの水耕栽培の支援を計画しているとのことだった。

農家の方と

また、国道４５号線から山間部に向かうまでのおよそ２－３キロの

農地は、土地の個人売買の動きが始まっているようだ。町が打ち出した復興計画によると旧市街地の大半が非居住地区になってしまう。これにより市街地が山側に移ることが予想され、今後これらの土地に住宅建設の計画が予想される。この農地―宅地の件に関しては現在県や町は介入していないため、早めに個人間で売買しようという動きがあるようだ。

【漁業関係の状況】

漁港の状況を見るために赤浜加工場を訪問した。土曜日午前ということもあり、閑散としていたが 1 件だけ開いていた芳賀鮮魚店で話を聞くことが出来た。芳賀鮮魚店は震災後、地元にあった他の鮮魚店とともに大槌町地場品復興プロジェクトを立ち上げて、サポーターを募集して資金を集め、今年 6 月に店舗を再開することができたとのことである。当日は夫婦 2 人で朝一番に上がった宮古産サンマなどを各地へ発送した後始末の作業をされていたが、普段は 3－4 名の従業員とともに仕事をされているとのことである。忙しい中、私たちの突然の訪問にも快く応対して頂いた上に、獲れたてのサンマや本日 1 杯だけ上がったという貴重な真イカを捌いて刺身でもてなして下さった。その暖かいもてなしの心にお礼を申し上げるとともに、大槌町の重要な産業である水産加工業の 1 日も早い復興を祈らずにはいられない気持ちとなった。

芳賀鮮魚店にて

【結論】

平成 24 年 8 月末現在、大槌町は仮設住宅 48 団地、2,106 戸、入居者総数 2,059 世帯、4,665 人である。そのため、私達が当初計画していた仮設住宅居住者に対する一律公平な配分は今回の予算規模を考慮すると困難であると思われた。また、大槌町役場より災害義援金は公的、私的なものを合わせて 90 億円弱であることという情報を入手したこと、及び仮設住宅訪問などによる町民への直接的な情報収集の結果、義援金並びに支援物資の充実により物質的支援は不要との判断になった。一方で情報収集にご協力頂いた多くの方から「町の将来を担う子供たちへ有効活用してほしい」との要望あったことを受け、教育関連の調査を

進めたところ、予算規模から町内 8 か所にある幼稚園（2 園）、保育所（保育園 5、託児所　1）（児童総数約 500 名）への物的支援が現実的であるとの結論に達した。町内の乳幼児施設すべてを訪問した結果、被災を免れた 1 施設を除き、各施設において不足している物資に違いはあったが、いずれも、町からの公的支援や、送られてくる支援物資では賄えていないものがあることが判明した。以上の状況を検討した結果、被災を免れ、支援要望のなかった 1 施設（大ヶ口保育園）を除く 7 施設に対し計 80 万円程度の物資支援を実施することとした。残りの 80 万円は一般社団法人「おらが大槌夢広場」で行っている町内在住の高校生による「こども議会」プロジェクトに対し、その使途を模擬議会で検討の上、結果を報告してもらうことを条件に「町田基金」及び「弘前記念病院基金」として寄附することとした。

【おわりに】

今回、私たちは震災から 1 年半が経過した大槌町を訪問し、多くの方々の協力を得て、JMAT 活動費を有効に活用すべく調査をさせて頂く機会を得た。久しぶりに訪問した大槌町では瓦礫の撤去作業が進むとともに、津波で浸水した土地には雑草が生い茂り、一見したところ震災の生々しい傷跡は失われつつあった。ショッピングセンターは人々でにぎわいを見せ、通学する学生、子供たちの様子も元気そうである。医療機関は入院機能を隣接する釜石市に頼らざるを得ない状況ではあるが、新設、仮設と復旧度合いに違いはあるが、震災前の体制をある程度回復していた。その一方で、震災時の悲しい体験はいまだにことあるごとに人々の話題に上っているようである。

教育機関である乳幼児施設や小中学校の仮設施設の機能は順次整えられつつあるが、仮設施設利用期間が長期化することによる教育環境の悪化を懸念する声も聞かれた。町の将来を担う子供たちのためにも 1 日も早い本格的な園舎、校舎での教育機会の回復が望まれる。仮設住宅の環境も物置の設置や風呂の追い炊き機能の整備などにより徐々に改善しているが、震災後 1 年半を経過した現在も多くの方々が仮設住宅住まいであることに変わりはなく、震災前の暮しには程遠い状況である。町民の皆さんのご苦労と生活復興に向けた長い道のりを思うと心が痛む。

物資支援には適切なタイミングと、量の調整が必要である。全国各地から届けられた支援物資により、被災地の生活物資が補完されている一方で、現地で必要とされている以上に届いている物資も多く、その分別と保管に多大な労力が費やされている事例も散見された。特に自動車、楽器など高価な支援物資については、有効活用できない場合には他地区で有効活用できるよう再分配するなど制度の整備が必要であると思われた。また、個別の聞き取り調査により支

援物資に含まれていない物資の不足が判明したことは、実際に、現地で見聞した上で、必要な支援を行うことの重要性を教えてくれた。

今回の調査では大槌高校避難所の取りまとめ役を務められていた佐々木亮氏、大槌高校避難所でボランティア活動を行っていた常井力氏をはじめとした懐かしい方々との再会と新しい出会いに大いに助けられた。あらためて大槌町の人々とそこに関わっている人々の温かい気持ちを感じるとともに、人とのつながりこそが復興の原動力であるように思われた。震災という未曽有の困難に見舞われた多くの方々の本当のご苦労は推しはかることもはばかれるが、今後も末永く、大槌町をはじめ、被災地の方々に対して出来ることを探しながら、応援していくことが大切であると思われた。

謝辞

今回の活動に際し、お忙しい中、貴重な時間を割いて応対して頂いた大槌町役場の皆様、大槌町社会協議福祉会の皆様、道又医院院長　道又衛先生、釜石保健所　小笠原様、大槌高校　佐藤副校長、山田南小学校　佐賀校長、新生おおつち副会長　佐々木亮様、一般社団法人おらが大槌夢広場　阿部様、臂様、

芳賀鮮魚店　芳賀様、地域里山保護員　常井様、町内幼稚園、保育施設の皆様、ほか大槌町、山田町の皆様に心より感謝申し上げますとともに、被災地の復旧、復興が１日も早く実現することをお祈りいたします。

　また、今回このような貴重な機会を与えて頂いた町田社長をはじめ、本活動を支援して頂いた弘前記念病院と町田アンド町田商会社員の皆様に深謝いたします。ありがとうございました。